

令和二年度文化芸術ふれあい事業

琉球の組踊と大和の能・狂言

《主催》那覇市

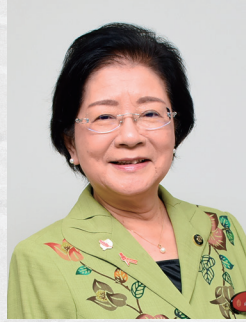
報告

組踊実演家を対象とした能楽と狂言のワークショップ
組踊「二童敵討」の実演

琉球の組踊と大和の能・狂言

目次

ごあいさつ（那覇市長 城間幹子）	2
事業概要	3
ワークショップレポート	4
◆能楽	5
◆対談（大倉源次郎・宮城茂雄）	8
◆狂言	9
組踊と狂言の基本の所作・表現の比較	11
組踊「二童敵討」の実演	13
◆見所・聞き所（眞境名正憲・比嘉康春）	14
那覇市主催の主な伝統芸能公演	15



那覇市長
城間 幹子

はいたい ぐすーよー ちゅうがなびら。

令和二年度文化芸術ふれあい事業の映像配信およびパンフレットの発刊にあたり、ごあいさつを申し上げます。

組踊は初演から三百年余りを数える、琉球王国時代の国劇です。一七一九年に国賓として迎えた中国からの使者をもてなす芸能として首里城で上演されてきました。今日に至るまで、琉球処分、沖縄戦という伝承の危機に見舞われたものの、先人より大切に継承され、今なお多くの人に愛され続けています。

組踊は音楽や舞踊、古語といったせりふを取り入れた総合芸術で、その所作一つひとつが観客の想像力を刺激し膨らませます。また、所作と音楽が一つになることで、わずかな顔の傾きや見つめ合うしぐさから感情を表現する場面もあり、セリフに頼らない繊細な感性が伺えます。そのような表現が確立した根底には、創始者である玉城朝薫が江戸立ちの際に興じられた能楽、狂言などの影響を受けているといわれます。

今回は、能楽、狂言と組踊の表現手法の違いを比較研究するワークショップを開催し、組踊の表現について探求しました。参加した組踊演者の身体に宿ったワークショップの成果は、組踊「二童敵討」によって体現され、組踊の奥深さを感じさせました。

新型コロナウイルスの影響により、当初予定していた組踊公演が開催できず無観客での上演・配信となりました。このような状況下で、舞台に携わるアーティスト、それを支えるスタッフ一同、組踊の普及啓蒙活動をどのように行えばいいのか試行錯誤した中での取り組みでしたが、開催することで文化芸術を守り、未来へ繋げる事になるという思いが一つになりました。

相手の心情を汲み取り思いやる心を持つことが、平和を希求する心につながるものであり、文化の持つ力によって育まれると思っております。本市では「ひと つなぐ まち」をキャッチフレーズに「協働によるまちづくり」を進めておりますが、文化芸術をおして人と人の心をつなぎ、まちづくりの礎となる人材を育むことができると確信しております。

令和三年に市制施行百周年を迎えるにあたり、「次世代の未来を拓き、豊かな学びと文化が薫る誇りあるまちづくりを」の実現に向けて、一層取り組んでまいりますので、ご理解とご協力を、ゆたさるぐとうにげーさびら。

令和三年二月

那覇市長 城間 幹子

琉球の組踊と大和の能・狂言

平成二十四年度から継続している那覇市文化芸術ふれあい事業の一環として、令和二年度は組踊の発展的な可能性を探るために、実演家向けの「能楽」と「狂言」のワークショップを実施しました。

琉球王国時代に玉城朝薫が創作し、今日まで受け継がれている沖縄の伝統芸能「組踊」。江戸立ちの際、朝薫が目にした大和の芸能をも取り入れたと言われています。三百年もの時を経て磨き上げられてきた組踊の源流をたどるため、大和の芸能である能・狂言の基礎を、今後の沖縄の芸能を担う実演家が体験しました。

また、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大を防止しながら、大和の能・狂言などに影響を受けて創作されたといわれる組踊「二童敵討」のオンライン配信を行います。

どちらの取り組みも、本パンフレットと動画をあわせてご鑑賞ください。



オンライン配信へのアクセス方法

ワークショップのダイジェスト映像と、組踊「二童敵討」のオンライン配信は「那覇文化芸術劇場 なはーと」の公式ホームページおよびSNSよりご覧いただけます！

[配信期間] 令和三年二月二十六日(金) 十二時～三月三十一日(水)

那覇市文化芸術劇場 なはーと
公式ホームページ

URL <https://www.nahart.jp>



Facebook

ID theatrenahart (那覇文化芸術劇場 なはーと)
URL <https://www.facebook.com/theatrenahart>



Instagram

ID nahart2021
URL <https://www.instagram.com/nahart2021/>



能楽ワークショップ



日程
 〔二日目〕十一月九日(月)
 〔二日目〕十一月十日(火)
 〔三日目〕十二月二十日(月)
 〔四日目〕十二月二十二日(火)

講師
大倉源次郎

参加者
 組踊実演家(九人)
 〔立方〕嘉数道彦・宮城茂雄・玉城匠
 〔歌三線〕新垣俊道・仲村逸夫・仲村渠達也
 〔器楽〕久志大樹・入高西諭・宮里和希

能

楽小鼓方大倉流十六世宗家で人間国宝の大倉源次郎師を講師に迎えた四日間のワークショップには、九人の若手組踊実演家が参加しました。沖繩での公演や講座の経験があり、石垣島の伝統芸能「大洞小洞」の伝承に関わるなど琉球芸能への造詣も深い大倉師の指導で、能楽経験のある玉城朝薫の追体験などをテーマに進められました。

座学では能楽囃子の概論や小鼓の変遷、謡と囃子の関連性などが説明されました。世阿弥が説いた能楽の技芸の基本である二曲三体(歌・舞と男体・女体・老体)の理論や、平安時代末期から鎌倉時代の白拍子の持つ小鼓の絵、室町時代初期の小鼓の胴、アフリカやアジアの鼓の写真などが掲載された資料も配布され、参加者は、歴史や地域の広がりの中で理解を深めました。

実技では、一人一人が小鼓を持ち、講師の先導で打ち「チ」、「タ」、「プ」、「ボ」と音を出しました。組踊では一線の舞台上に立つている参加者ですが、小鼓は初体験の者が大半。砂時計のようにくびれた「胴」と二枚の革、それらをつなぐ「調べ緒(シラベオ)」などを興味深そうに観察し、手こずりながらも「ツ頭(ヒトツガシラ)」など基本の手組に挑戦しました。また、「八八八六」の琉歌を七五調の謡の節にのせる試みもあり、八拍構造の能のリズムと組踊音楽の違いなどを体感しました。朝薫にも思いを馳せた様子で「小鼓の奥深さを感じた」、「沖繩の伝統音楽にいかした」などの感想があがりました。

狂言

ワークショップ



日程

〔二日目〕十二月九日(水)
 〔二日目〕十二月十日(木)

内容

狂言の基本についてと組踊との共通点を探る

講師

深田博治

参加者

組踊実演家(四人)
 〔立方〕嘉数道彦・佐辺良和・玉城匠・上原崇弘

一日間連続、約十時間の狂言ワークショップは、ソーシャルディスタンスを守りながらも濃密に練り広げられました。初日冒頭は、講師、参加者互いの芸歴紹介から始まり、深田師からは国立劇場おきなわの組踊研修や、沖縄県立芸術大学のカリキュラム、組踊立方の役割や演技等について質問が矢継ぎ早に飛び、参加者もまた、狂言演者の役割や演技、演出、流儀の違い等について聞き、各々の芸能とそのシステムへの理解を深めました。

謡本を用いての稽古では、マスク着用をものともしない謡で鍛えた発声の妙や音量が稽古室に響き渡り、「舞台はエネルギー勝負、八十九歳の万作先生が最も力を出し切っています」と語る深田師に、一同目を瞠りました。吟遣いの強弱等も代表的な演目から次々と披露され、狂言役者のセリフ術の神髄にふれつつ挑戦を重ねましたが、もちろん一筋縄にはいきませんでした。しかしながら、舞は直ぐに合格点が出ました。たとえば室町時代の歌謡にあわせた「晝」という朝帰りをモチーフにした舞では、採り物の扇の扱い等に講師は感心しきり。また、数多い狂言のなかでも「棒縛」は、沖繩芝居にもあるお馴染みの曲であることから、それぞれの比較もできました。深田師は「ひとくちで言うと、狂言はセリフベース、組踊は音楽と舞踊ベース」と形容しましたが、参加者もその違いや類似点を体得しました。初めてのワークショップは、継承や展開へ向けての新たな可能性となったようでした。

能楽

「内容」 能楽の基本について

講師

大倉源次郎

能楽囃子方 大倉流小鼓方 十六世宗家

おくら げんじろう



プロフィール

一九五七年大阪生まれ。甲南大学卒。

能楽小鼓方大倉流十六世宗家(大鼓方大倉流宗家預かり)。公益社団法人能楽協会理事。一般社団法人東京能楽囃子科協議会理事。流派を超えて二十一世紀の能を考える「能楽座」座員。二十代より能公演はもとより、誰もが日本文化である能と気軽に会えるよう「能楽堂を出た能」をプロデュース。新作能、復曲能にも数多く参加。海外公演延べ二十カ国三十ツアー四十五公演を超える。子ども向け能楽体験講座など各地で開催。奈良県商工会議所青年部委嘱作品新作狂言「釜の火」を制作。

受賞歴

一九九二年 大阪市咲くやこの花賞。

二〇一六年 法政大学観世寿夫記念能楽賞。

二〇一七年 重要無形文化財保持者の認定を受ける。

参加者コメント

慣れない小鼓を手に、全四日間のワークショップに挑んだ九人の参加者。能楽の奥深さに触れ、また、能楽と組踊とのつながりに改めて思いを馳せたよう。貴重な体験を終えた皆さんに、感想を伺いました。

立方

嘉数道彦

(かかず みちひこ)



初めて鼓を手に取り、厳密な能楽の世界を、身を持って感じました。琉球芸能と異なった拍子や詞章など、耳慣れない世界観の中で先生からのご指導を、しっかり理解するまでには至りませんでしたが、独自の芸能を創り出してきた先人たちに思いを馳せる貴重な機会でした。

宮城流能里乃会師範。
初代宮城能造、宮城能里に師事。
国立劇場おきなわ芸術監督。

立方

宮城茂雄

(みやぎ しげお)



先生の「玉城朝薫の追体験を」というお話がとても印象深く残っています。朝薫が奏でたであろう小鼓を、実際に体験することができ貴重な機会になりました。能楽の囃子の影響がうかがえる「若衆こてい節」の出演の拍子について、より深く学ぶことができました。

宮城流師範。
二代目宮城能造に師事。

立方

玉城匠

(たまき たくみ)



本格的に小鼓に触れるのは初めてで、「体験する」というところまでしかできませんでしたが、能から影響を受けた組踊ですが、琉球独自の路線を模索した足跡を辿る様な気持ちで、四日間貴重な経験をさせて頂きました。改めて組踊が好きになったワークショップでした。

宮城流豊舞会教師。
宮城豊子、島袋美智子に師事。
国立劇場おきなわ組踊研修修了。

歌三線

新垣俊道

(あらかき としみち)



玉城朝薫は元服した際、国王から小鼓を拝領し、能楽にも精通していたことが伺えます。組踊を創作するにあたり、能狂言などの要素をどのように取り入れたのか、また仕舞などをどう習得し、どのような思いで技芸に取り組んだのかなど色々と考えさせられました。

琉球古典音楽野村流保存会師範。
新垣一雄に師事。
国立劇場おきなわ組踊研修修了。

歌三線

仲村逸夫

(なかむら いつお)



能の音楽は、お囃子(四拍子)を中心に掛け声とリズムが複雑に重なり、お互いの呼吸を感じ取りながら演奏している点が見でした。朝薫が組踊を創りだすときにもしかしたら行ったかもしれないお囃子と唱え(琉歌)の融合への挑戦など、大変貴重な経験でした。

琉球古典音楽野村流保存会師範。
比嘉康春に師事。
国立劇場おきなわ組踊研修修了。

参加者コメント

歌三線

仲村 渠達也

(なかなだかり たつや)



笛

入高 西諭

(いりたけにし さとし)



太鼓

久志 大樹

(くし だいき)



太鼓

宮里 和希

(みやざと かずき)



琉球士族の教養だった能楽の世界を、追体験できたことは貴重でした。琉球芸能には、「地謡」や「橋掛り」など能楽と共通する語が使われている他、組踊の台本には能のやり方を移したと思われる箇所もあります。今後、も能楽への理解を深め、琉球芸能を考えていきたいです。

琉球古典音楽野村流音楽協会師範。松田健八に師事。国立劇場おきなわ組踊研修修了。

組踊・琉球舞踊では立方や歌三線に合わせるため、無拍子で音楽をつくりまします。能楽の音楽は、基本八拍拍子の決まりの中で、謡・囃子などが音を聞きながら連動し、それに合わせ、シテや立方が舞います。能楽と琉球芸能の音楽構造の違いに興味深かったです。

琉球古典音楽安富祖流絃管会師範。大湾清之に師事。国立劇場おきなわ組踊研修修了。

鼓を学び、琉球古典音楽はなぜ五つの楽器で構成されるのかなど、考えたこともなかったことのヒントになりました。沖縄の気候も影響があったのではないかと思います。組踊の初期には今はない鼓も演奏されたのか、ロマンを感じる大変貴重な追体験になりました。

光史流太鼓保存会師範。島袋光史、比嘉總に師事。

全四回の小鼓ワークショップ。楽器を少し触っていたので音を出すことや音の区別が出来ました。琉歌を「能楽」のリズムに変えた演奏などを通して、日本の伝統音楽のおもしろさを味わいながら、学ぶことができました。今後、沖縄の伝統音楽に活かせたらと思います。

光史流太鼓保存会教師。比嘉總に師事。国立劇場おきなわ組踊研修修了。



ワークショップ風景

大倉源次郎



対談

宮城茂雄

組踊立方



大倉 四日間のプログラムでは、小鼓など能楽の実技面を中心にお話をしたつもりです。

一七〇〇年代初頭に能楽を経験した玉城朝薫たちが不思議に感じたであろうことを、ひもといて、朝薫がびつくりしたり、不思議に思ったりしたことなどを追体験してもらおうと考えました。また、アジアの中で能楽や琉球芸能がどのような位置を占めているのかなど、色々なことに興味を持ってほしいと思います。舞なら舞、太鼓なら太鼓だけやっつけていればいいのではなく、コナ禍で改めて人間の営みを考えさせられる時期でもあり、現代において伝

能楽を通し、玉城朝薫を追体験。

現代社会で伝統芸能をする意味とは。

先人の積み重ねに感謝し、次世代に伝える。

統芸能をやる意味なども考えてほしいと思います。ともすれば、文化なんていらないと言われる世の中でしょう、経済社会とは違う時間軸で僕らは動いています。「好きだからやっている」だけではなく、先人の積み重ねに感謝し、それを次の世代に伝える大きな役目があること、徒や疎かにできないことを伝えたかったです。私も身を正さなければいけません。

宮城 十四年前に京都に滞在して謡と仕舞をお稽古したことがあり、先生も見所から何度もお聴きしていました、こんなに難しいのかというのが正直な感想です。朝薫は仕舞「軒端の梅」を舞つ

たりしていました、先生が見せて下さった小鼓が四百年前のもので、朝薫もどこかでこの音と出会っていたのか：などと想像が膨らみました。先生が、我々琉球芸能家向けに考えて教えて下さり、ありがたく、あつという間でした。

大倉 みなさん芸に対して真剣で、好感を持ちました。舞台に対する思いも素直でまじめに取り組んでおられます。シャイというか謙遜されるころもありました。積極的な体験が組踊に活かされると思います。芸を盗むのはただな

宮城 狂言を見ていると台詞の作り方というか、表現方法が、組踊の男の唱

えの段取りとよく似ているところがあり、影響を受けたのかなとも思います。たとえば、狂言の「千鳥」の詞章は琉球舞踊の「前又浜」にも入っています。

大倉 追体験をというのはそこ。薩摩侵略のあと、謡が琉球士族にポピュラーな文化になっています。朝薫も能や狂言のことを知らない、あれだけの作品は作れません。

石垣島の大洞小洞（ウードウクードウ）は江戸時代に伝わった能楽囃子の奇跡的な残照と言えます。謡と笛は絶えなければ、よくやめちゃわなかつたと思います。琉球の方言では謡の言葉を使わないから謡曲は残らなかった

のかもしれない。謡曲の未来を暗示しているようでもあります。「古い言葉だからいいよ」と日本人の気持ちの薄れると、謡曲は途絶えます。同じように、沖縄では琉歌を大事にしないといけません。自分たちのことばは意味があるのだと、各地域の人たちが自覚しなければと思います。

宮城 組踊の言葉は独特のスタイルで作られているので、もう一度見詰め直さなければと思います。唱えの詞章に、能楽のゴマ節（ゴマ点・節付の記号）を振ってみると、新しい発見がありました。語尾の伸ばし方や詰め方、息継ぎをどうするか、などが見えてくるようです。落胆しているときには一・五拍の間を入れてみるとか、急いでいるときは〇・五拍詰めるとうなるだろうかとか、感覚でやっていたことに違う角度から光をあてることができました。

大倉 朝薫の時代のテキストが残っていればね。謡本は知っていたはずだし、ゴマ節を使わなかったはずはないと思うんです。今までの沖縄のやり方とどちらが優れているではなく、両方の考えかたで、新しい発見があればいいですね。

宮城 自分のやっている組踊、舞踊を見つめる、四日間でした。ありがたうございました。

大倉 僕などは、いろいろ経験させて頂いて、視野が開けたのは五十を過ぎて六十ぐらいかもしれない。このようなワークショップは初めてで、いい勉強になりました。

狂言

「内容」狂言の基本についてと組踊との共通点を探る

講師

深田 博治

狂言方 和泉流能楽師（万作の会）

ふかた ひろはる



プロフィール

一九六七年生まれ。野村万作に師事。
国立能楽堂・能楽三役第四期研修修了。
重要無形文化財総合指定保持者。

万作一門の研鑽会「狂言ざゝん座」同人。
すでに『奈須与市語』『三番叟』『釣狐』『金岡』等を披き、「万作の会」の演者の一人として国内外の狂言・能公演に出演。朝日カルチャーセンターをはじめ、全国各地での狂言講座、ワークショップで講師を勤め、狂言の普及に力を注いでいる。
出身地・大分で「狂言やっとな会」を主宰している。

指導を終えて

これまで日本各地や海外でも数多くワークショップを行ってきましたが、組踊立方の皆さんはさすがに覚えが早くて驚きました。ことに舞の身体の使い方に共通する点があるようで、所作が綺麗だと感じました。

謡は馴染みのないリズムや言葉でかなり苦戦していましたが、私にとっても組踊の唱えは音調が同じでお経のように聞こえますから、ムリもありません。

狂言も組踊も、それぞれの歴史や自然風土の中で磨き続け現代に継承されてきた古典芸能ですから、今回のような交流の機会をもてたことは意義深く、感謝しています。

参加者コメント

全二日間の狂言ワークショップに挑んだ四人の参加者。短い時間でしたが、狂言の発声、謡、舞などに挑戦し、琉球芸能との違いや共通点を見出したよう。貴重な体験を終えた皆さんに、感想を伺いました。

立方

嘉数道彦

(かかず みちひこ)



所作や歩みなど、琉球芸能と似通う点、共通する点もある一方で、発声や台詞、謡のリズムなど、真似ることすら難しく感じた点も多くありました。「狂言」という古典芸能の型や表現技法を体験することによって、あらためて組踊や古典舞踊など琉球芸能の様式を見直し、さらに追求していくための糧としたいです。

※プロフィールは五ページ参照

立方

佐辺良和

(さなへ よしかず)



何度か狂言鑑賞の機会はありましたが、基本的な発声や歩み、謡、セリフ、舞などを解説付きで拝見し、実際に挑戦してみてもその声量や演技の幅に圧倒されました。身体の使い方やすり足の運び方など似ているようで微妙に違う点など興味深く、あらためて琉球芸能のルーツについて考える機会になりました。

琉球舞踊世舞流良和の会会主。又吉世子に師事。

国立劇場おきなわ組踊研修修了。

立方

玉城匠

(たまき たくみ)



初めての体験でしたが、長い歴史を持つ狂言が時代に応じて変化したことや、演目によっては筋や演出をアレンジできる自由さ、懐の深さを持つていることに驚きました。すり足や舞の基本的なところは組踊に似ているように思いますが、喜劇として常に面白さを追求する精神などが勉強になり楽しく学ぶことができました。

※プロフィールは五ページ参照

立方

上原崇弘

(うえはら たかひろ)



「構え」と呼ぶ基本姿勢や「運び」と呼ぶすり足、謡や舞、声の使い方やセリフ回し、演技等、狂言を教わり体験できたことはたいへん刺激的でした。初めて沖縄と日本の古典芸能の似ている点や違う点などを身体を通して学ぶ機会を得て、私は組踊に立ち返り精進しなければいけないと思いを新たにしました。

玉城流喜納の会教師。伊波正江に師事。

国立劇場おきなわ組踊研修修了。

ワークショップ風景



組踊と狂言の基本の所作・表現の比較

何もない舞台上で素顔で結髪もせず類型的な衣裳で演じられる狂言は「素手の芸」とも呼ばれています。同じくセットを使わない組踊ですが、役柄にそって化粧・扮装はもちろん手事という固有の登場音曲も用います。

基本の所作を比較すると、類似点や違う点が見えてきますが、共通するのはどちらも舞台空間で確固として存在する型があることです。

組踊



【解説】組踊の所作である歩みや演技、踊りなどは、全て琉球古典舞踊の型が基本となっています。その特徴は、性別と年齢によってジャンルが分けられていることです。男の構えは、按司や大主など身分の高い者の場合、やや前傾姿勢で腰を落とし、足を肩幅ほどに開きます。爪先は八の字に開きます。

狂言



【解説】背筋を伸ばし、あごを軽く引いて、腰を後ろへやや引いて胸を反らす狂言の基本姿勢を「構え（かまえ）」と言います。この時、膝と足首は軽く曲げ、腕は両ひじを返して張り、肩の力を抜いて両脇に固定します。和泉流では掌は軽く握って内側に向けますが、流派によって違いがあります。

構え
男



組踊



狂言

構え
女

【解説】組踊の女の基本姿勢は男と同じくやや前傾姿勢で腰を落とし足元は開き、左足の爪先をあげます。腕は身体に沿わせ脇に添えます。琉球王国時代から男性による女形芸であるため、古典舞踊の女踊の技法で気品ある所作を旨として表現されます。

【解説】女の構えは、男と違って足を開かず、かかとを揃えます。両ひじも張らずに肩の力を抜いて身体に沿わします。ちなみに狂言に登場する女は、頼りない男を叱咤激励するたくましさを持っています。素顔に長い白布の美男鬘（びなんかずら）で女性を表現するのも狂言独特の表現です。



組踊



狂言

表現
泣く



【解説】様式に沿って少ない動きのなかで登場人物の心情を表現する組踊では、「泣く」演技は、頭を下げ袖をとった両手を目の前近くにあてるだけです。

座っている場合も、頭をじっと下げ微動だにしないことで深い悲しみを表現します。「泣く」時にふさわしい古典音楽の歌三線が、立方の気持ちを代弁してくれるからです。

【解説】狂言の演技は、現代演劇と違って完全な写実ではなく様式的な写実と言えます。例えば、「泣く」演技は、下げた頭の目の前あたりに両手をあてて泣いていることを表現します。腰も少しかがめています。

左手のみをあてる場合や、「えへ、えへ、えへえへえへえへ」等という独特の大きな泣き声をあげ、「泣く」感情の普遍性と幅を表現します。

[モデル] 深田 博治 (狂言) / 玉城 匠 (組踊)

組踊「二童敵討」

令和三年二月二十四日（日）に、組踊「二童敵討」の実演と収録を実施いたしました。
能楽・狂言のワークショップと本発表は、オンライン配信にてご覧いただけます。詳細は本パンフレットの二頁にてご確認ください。

〔立方指導〕眞境名正憲
〔地謡指導〕比嘉康春

立方

あまおへ 宇座仁一
鶴松 宮城茂雄
亀千代 金城真次
母 新垣悟
供一 上原崇弘
供二 佐辺良和
供三 嘉数道彦
きゃうちやこ持ち 玉城匠

地謡

歌三線

箏 仲村逸夫
笛 喜納吏一
胡弓 仲村渠達也
太鼓 林杏佳
久志大樹
森田夏子
入嵩西諭



後列左から 林杏佳、入嵩西諭、仲村渠達也、久志大樹、眞境名正憲、比嘉康春、仲村逸夫、喜納吏一、森田夏子
前列左から 上原崇弘、佐辺良和、金城真次、宇座仁一、宮城茂雄、新垣悟、嘉数道彦、玉城匠



オンライン配信を
お楽しみいただくために！

組踊「二童敵討」とは？

一名、「護佐丸敵討」。護佐丸の遺児二人が踊り子に身をやつし、父親の仇・阿麻和利を討つ物語。組踊の創始者・玉城朝薫五番の一つ。一七二九年の初演以来、「執心鐘入」と共に組踊の代表的な作品として有名です。能を主体とした先行芸能の影響を受けつつ独自の芸能として大成した組踊の中で、「曾我物」との関連があげられる本作は比較上演の機会も多いことから、本事業を締めくくる舞台として上演します。



立方指導の眞境名正憲さん(中央)、地謡指導の比嘉康春さん(右)に
嘉数道彦 国立劇場おきなわ芸術監督が、組踊「二童敵討」の見所・聴き所についてうかがいました。(令和三年一月二十四日)

見所・聴き所

立方指導

眞境名正憲



十五世紀の「護佐丸・阿麻和利の変」を題材に、忠孝精神を盛り込んだ仇討物。約四分の短編ですが、様式美あふれる構成や緩急に富む展開で、最初から最後までムダがなく全て見所と言えます。ことに冒頭の阿麻和利が唱えるセリフとダイナミックな七目付は、王国崩壊後から現代まで錚々たる役者によつて継承されてきた技芸です。

舞台を取り巻く厳しい状況に負けず研鑽を積み、組踊と向き合う中堅若手の熱演に期待します。

地謡指導

比嘉康春



朝薫五番はどれも物語の展開に沿った選曲や、セリフと音楽の配分のバランスが絶妙です。

中でも本作は、古典の名曲三曲が盛り込まれた二童と母親の別れの場面から、後半の豊みかけるようなテンポ良い舞踊音楽が続く仇討ちへと、筋と音楽の序破急が呼応し聴き所満載の作品です。能狂言ワークショップを体験し、改めて組踊を解きほぐし作品とどう向き合うのか。組踊のアイデンティティあふれる舞台に期待します。

平成二十八年 文化芸術ふれあい事業 沖縄伝統芸能公演(組踊)

【期日】平成二十八年十二月十二日(土)・十三日(日)
【会場】パレット市民劇場



第一部 組踊「二童敵討」より

第一部 組踊「二童敵討」

【作者】 玉城朝薫
【指導】 宮城能鳳
【出演】 沖縄伝統組踊「子の会」
(※一部賛助出演あり)

第一部 組踊版「さるかに合戦」

【脚本・演出】 嘉数道彦
【振付】 阿嘉修
【音楽監督】 仲村逸夫

〈立方〉

かに 川満香多
さる 玉城匠
かにこども1 伊波留依
かにこども2 高里風花
さるこども 宮崎花澄
後見 嘉数愛美・玉城知世

〈地謡〉

〔歌三線〕 玉城和樹・和田信一
平良大・上原崇弘
池間北斗
〔箏〕 入嵩西諭
〔笛〕 高宮城実人
〔胡弓〕 久志大樹
〔太鼓〕

◆関連事業

アフタートーク

観劇後に、出演者に稽古中や本番などの裏話、ここでしか聞けない貴重な話や、出演者の素顔に迫る話などが聞けるアフタートークイベントを開催。



第二部 組踊版「さるかに合戦」より



平成三十年度文化芸術ふれあい事業沖縄伝統芸能公演（組踊）

〔期日〕平成三十一年一月十九日（土）・二十日（日）
 〔会場〕パレット市民劇場

第一部 組踊版「スイミー」

〔監修〕嘉数道彦
 〔指導〕喜納彩華
 〔出演〕ワークショップ参加者16名
 （那覇市内在住小学1～6年生）
 〔立方〕上原崇弘
 〔賛助出演〕
 〔地謡〕沖縄伝統組踊「子の会」

第一部〔十九日〕 組踊「万歳敵討」

〔作者〕田里朝直
 〔指導〕宮城能鳳
 〔出演〕
 沖縄伝統組踊「子の会」※ 沖縄伝統組踊「子の会」※

第一部〔二十日〕 組踊「二童敵討」

〔作者〕玉城朝薫
 〔指導〕宮城能鳳
 〔出演〕

第三部 組踊版「さるかに合戦」

〔脚本・演出〕嘉数道彦
 〔振付〕阿嘉修
 〔音楽監督〕仲村逸夫
 〔立方〕川満香多
 かに 玉城匠
 さる 伊波留依
 かにこども1 高里風花
 かにこども2 宮崎花澄
 さるこども 嘉数愛美・玉城知世
 後見

〔地謡〕玉城和樹・和田信一
 〔歌三線〕平良大・上原崇弘

〔箏〕池間北斗
 〔笛〕入嵩西論
 〔胡弓〕高宮城実人
 〔太鼓〕久志大樹

◆関連事業

〔タイトル〕知ってる組踊？
 〔会場〕那覇市民ギャラリー1第2展示室（パレットくもじ6階）
 〔期間〕平成三十一年一月十五日（火）～二十日（日）



琉球の組踊と大和の能・狂言

《能楽ワークショップ》

◆監修・講師 大倉源次郎

(能楽囃子方大倉流小鼓方十六世宗家 重要無形文化財各個認定「人間国宝」保持者)

◆参加者 (組踊実演家)

- 嘉数道彦
- 佐辺良和
- 宮城茂雄
- 玉城匠
- 新垣俊道
- 仲村逸夫
- 仲村渠達也
- 久志大樹
- 宮里和希
- 入嵩西諭

《狂言ワークショップ》

◆監修 野村萬斎

(狂言方和泉流能楽師万作の会 重要無形文化財総合指定保持者)

◆講師 深田博治

(狂言方和泉流能楽師万作の会 重要無形文化財総合指定保持者)

◆参加者 (組踊実演家)

- 嘉数道彦
- 佐辺良和
- 玉城匠
- 上原崇弘

《組踊「二童敵討」の実演》

〔立方指導〕 眞境名正憲

(重要無形文化財「組踊」総合認定保持者)

〔地謡指導〕 比嘉康春

(重要無形文化財「組踊」総合認定保持者)

〈立方〉

- あまおへ 宇座仁一
- 鶴松 宮城茂雄
- 亀千代 金城真次
- 母 新垣悟
- 供一 上原崇弘
- 供二 佐辺良和
- 供三 嘉数道彦
- きやうちやこ持ち 玉城匠

〈地謡〉

- 歌三線 仲村逸夫
- 箏 喜納史一
- 箏 仲村渠達也
- 笛 林杏佳
- 胡弓 入嵩西諭
- 太鼓 森田夏子
- 久志大樹

舞台監督

當山恵一(舞創造)

照明

花城豊(ワイズプラン)

映像

RBCビジョン

スチール

大城洋平

制作

前西原祥子(シアター・クリエイト)

《報告書制作》

取材・編集 長嶺恵美子

写真撮影 眞栄里泰球

デザイン 具志堅梢

写真撮影 大城洋平

《主催》 那覇市

《企画・運営》 シアター・クリエイト

発行日 令和三年二月



組踊

能樂

狂言